

国際比較調査(4)「家族の中の子どもたち」

——上海・ソウル・ロンドン・ニューヨーク・東京——

目 次

要 約	2
はじめに	10
1. 調査対象都市の概要	12
●上海	12
●ソウル	15
●ロンドン	17
●ニューヨーク	20
2. 子どもと家族	23
●家族のかたち	23
●家族の暮らしー食卓からみた家族のまとめー	28
●自分の家はどんな家か	34
●子どもの成長	39
3. 親子関係をめぐって	48
●親子関係の姿	48
●親との距離	52
●親としての許容度	59
●2、3章のまとめ	64
4. 性差との関連で	66
●家庭の中の性差	66
●将来への見通し	74
●将来の家庭生活	83
資料1 調査票見本	91
資料2 都市別集計表	117

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

調査レポート

国際比較調査(4)

「家族の中の子どもたち」

—上海・ソウル・ロンドン・ニューヨーク・東京—

静岡大学教授
東京学芸大学教授
明治学院大学教授
東京学芸大学助教授

深谷昌志
深谷和子
望月重信
田村毅

調査協力者 (敬称略)

上海

卞立強 (京都外国語大学教授)
李力 (元東京学芸大学大学院生)
呉暉 (東京学芸大学大学院生)

ソウル

李貴胤 (梨花女子大学教授)
李光衡 (東京韓国総合教育院院長)
申東春 (東京韓国総合教育院教務部長)
宋秉一 (東京韓国総合教育院研究部長)

ロンドン

Adrian Furnham (ロンドン大学教授)

ニューヨーク

Dale Mann (コロンビア大学教授)
Charol Shakeshaft (ホフストラ大学教授)

要約

1. 子どもと家族

- ① 調査の目的は、子どもの目を通してそれぞれの地域の家族の姿と、子どもにとっての家族の意味を探り出すことである。
- ② 調査対象は東京、上海、ソウル、ロンドン、ニューヨークの都市の小学5年生、合計4,964名で（表2）、調査は1993年5月から1994年3月までに、学校通して行われた（表1）。
- ③ 子どもの人数や家族サイズは、一人っ子社会の上海は別として、東京とソウルが子ども数2人前後に集中し、分散が少ないのに対して、ロンドンとニューヨークでは分散が大きく、例えば4人以上の子どもがいる多子家庭は、東京はたった6%なのに、ロンドンでは25%、ニューヨークでは22%もあり、多様である（表3、表4）。
- ④ どの都市でも、母親の同居率は約95%かそれ以上で、たいてい子どものそばには母親がいるが、父親の同居率はその率を下回り、とくにロンドンとニュー

ヨークでは、79%、85%と、5、6人に1人は父親がいない家庭が出てきている。家族解体の深刻さがあらわれた数字であろう（表5）。

しかし母親の同居率は高くとも、多くの都市で母親の就労率は高くなっており、日中は子どものそばから親の姿が見えなくなっている。いちばん専業主婦率が高いのは、ソウルの45%であり、次いで東京の33%となっている（図1）。

- ⑤ 調査前日に朝食を食べなかった子どもは、ソウルとニューヨークに多く、ロンドンでは朝から学校給食を食べている子が2割もいる（表8）。夕食も含め食卓の状況からみると、東京の子どもは、5つの地域の中では親からの世話をかなり十分に受けている印象を受ける（表10）。
- ⑥ 夕食の同席者で、父親だけが不在の食卓は、東京が33%と最大で、父親が職場に拘束されている状況があらわれている（表11）。
- ⑦ 7つの項目を使用して、自分の家庭の評価をさせたところ、全体として自分の家庭に対する強い肯定的感情がみられるが、とくにニューヨークと上海にその数字が高い。中では東京の子どもの肯定率が最も低い（表17、表18、図2）。
- ⑧ しかし、「楽しい、のんびりする、緊張する、いらいらする」等の家庭における子どもの「居心地」を表現する形容詞を使ってみると、ニューヨーク、ロンドン、ソウルに居心地の悪さを肯定する数値が高い点に、何らかの問題の所在を感じさせられる（表19）。この点では東京の子が、上海と共に最も居心地のいい家庭にいるようである。

⑨ 子どもの自己像は、ニューヨークと上海で明るく、東京とソウルは暗い。幸せ感上海が群を抜いて高い（表20、図3、表21、図4）。

しかし学校忌避感情は、ニューヨーク、ロンドンが群を抜いて高く、上海が最も低い。毎日がつまらないという感情も、ニューヨーク、ロンドン、ソウルが高い（表22、図5、図6）。

⑩ 早くおとなになりたいかどうかを尋ねたところ、「もっと小さい頃に戻りたい」とする退嬰的感情は、ソウルが最も高く、34%、次いで東京、上海の順である。勉強のストレスであろうか（表23、図7）。

⑪ 将来の見通しは、社会的達成より家庭的達成の方が自分にはできそうだと考えられている。家庭的達成では上海の数字が高く、社会的達成では、ソウルの子がやや高いが、東京の子はそのいずれの数値も最小である（表24、図8、図9）。

2. 親子関係をめぐって

① 親子の意見が食い違ったとき、ロンドン、ニューヨークでは、子ども自身にかかわることについては、子ども自身の決定に委ねている反面、家族全体にかかわる決定事項は、親によって決定し、親がリーダーシップをとっている。

東京、上海、ソウルでは、その逆に子ども自身にかかわる事項に子どもの意見が尊重されず、親の意見が重視される。逆に、家族全体にかかわる意志決定場面で、子どもの意見が取り入れられる傾向を示す（表25、図10）。

- ② ロンドンとニューヨークでは歯みがきや就寝の習慣などの基本的な生活習慣と家庭内の役割分担について明確なルールを決め、厳格にしつけている。一方、東京では、親が子どものしつけについてあまり注意していない（表26）。
- ③ 体調が悪いときに学校をどうするかについての判断では、ロンドン、ニューヨークで子どもの健康が優先され、上海やソウルでは「学校に行くこと」が子どもの健康より優先され、勉強への期待と圧力がみられる。東京は両者の中間に位置する（表28、図12）。
- ④ 上海やソウルでは、口に出さなくてもお互いの気持ちがわかるという心理的な親子の連帯意識が強く、密着した親子関係である。一方、ロンドンやニューヨークでは伝統的な核家族の崩壊が進み、親子であってもお互いの気持ちがわかりにくい状況にある（表29、図13）。
- ⑤ 子どものわがままに対する許容度は、おかずの好き嫌いに例をとれば、やはり上海とソウルが大きく、次いでニューヨーク>東京>ロンドンの順になっている（表30）。
- ⑥ 上海、ソウルなど、親と心理的に密接な関係を保っている子どもは、そのうえまだ「もっと話す時間がほしい」「自分の世話をしてほしい」「もっと遊んでほしい」など、親との交流を多く求めている。しかし同時に、「うるさく言わないでほしい」と、両価的な気持ちも持っているのが特徴である（表31、図14）。

- ⑦ 子どもの将来の親との関係をみてみると、結婚した後、親との同居について、上海とソウルでは同じ家か隣の家に住みたい子が4分の3以上を占めるのに対して、ロンドンとニューヨークでは2割にも満たない。東京は4割で、ここでも両者の中間に位置する（表32、図15）。東京、ロンドン、ニューヨークではいずれも2割程度が、親に介護が必要になったとき、老人ホームに入れたほうがよいと考えるが、上海とソウルでは1%以下である（表33、図16）。

上海とソウルの親子には、伝統的な密着した関係が生きている。生涯にわたって親との関係を密に保とうとしている。

- ⑧ 家族の解体が進行しつつあるロンドンとニューヨークでは、親子関係は、独立性と世代間に境界を設けることが重視される。また、そのような関係を維持するために、親の意志決定機能としつけや家庭内の役割分担が明確に規定されている。

- ⑨ 東京の親子関係をまとめてみると、上海・ソウルと比較して、東京では親子の一体感が薄れ、子どもも将来、親と距離を置いた生活を望んでいる点などから、伝統的な親子密着のパターンはかなり崩れてきている印象を受ける。しかし、と言って東京は、欧米のように個を尊重する原則や親子間の境界や明確なルールの設定などは未確立で、欧米的な親子関係に近づいているとも言えない印象を受ける。

また東京の子どもたちは、家庭に大きな居心地のよさを感じているにもかかわらず、残念ながら親子関係における満足感や幸せ感は決して十分でないように見受けられる。

3. 性差との関連で

- ① 母の役割と父の役割に関連して、「夕食を作るのは母親」「収入の多いのは父親」という評価は、どの社会にも共通している。そうした中で東京は父と母との役割が分化しているのに対し、ロンドンやニューヨークでは父と母との性差が少ない（表34～36）。
- ② 母親の不在の時の夕食をどうするかでは、東京では母親が作っておく、つまり母親が母的な役割を担おうとしているのに対し、ロンドンやニューヨーク、上海では父親が作る。そしてソウルでは子どもが作っている（図17、表37）。
- ③ 家事の手伝いに関してみると、上海は男子女子共に家事を手伝うが、ソウルと東京の子どもの特に男子は手伝いをしない。ロンドンとニューヨークは上海と東京の中間に位置している（表39、表40）。
- ④ 将来何人子どもがほしいかでは、上海では1人、東京とソウルでは2人、ロンドンでは2～3人と、現状とほぼ同じ数の子を望んでいる（表44）。
- ⑤ 生まれ変わりの希望で、性役割の受容度をみると、どの都市でも男子は男子としての生まれ変わりを望んでいる。そして、ロンドンとニューヨークの女子の8割以上も女子に生まれたいと答えている。しかし、上海の女子の生まれ変わり願望は66%にとどまる（表45）。

- ⑥ 将来結婚した後での理想の生き方については、東京は男女共に専業主婦を望んでいる。それに対し、上海、ロンドン、ニューヨークでは男女共に共働きを考えている。そうした中で、ソウルでは男子は女子に専業主婦を望み、女子は共働きを望んでいるなど、性差による違いが認められる（図20、表46、表47）。
- ⑦ 将来、共働きだったとしてどちらが食事の準備をするかについて聞くと、東京では母親（女の人）が作るが68%を占める。それに対し上海、ロンドン、ニューヨークでは父親と母親とが「同じだけ」が6割を超える。そして、ソウルでは男子は母親がするのを望むが、女子は「同じだけ」したいと答えている（表49）。
- ⑧ 将来の見通して、上海やソウル、ニューヨークの子は見通しに男女差が認められないが、東京の女子は社会的な達成を断念して家庭志向をする態度を示している（図25、表54）。
- ⑨ 全体として、東京は性的な役割の分化した専業主婦志向が強いのにに対し、ロンドンやニューヨークでは性的な格差が縮小している。上海も性差は少ないが、女子たちの間に結婚や出産についての戸惑いが認められる。また、ソウルでは専業主婦を望む男子と共働きを求める女子との間に対立が存在している。

●

はじめに

最近になって家族は、世界的規模で、外側も内側からも大きく揺れ動いている。これまで家族の基本と考えられてきた夫婦と未婚の子どもの作る家族（核家族）も、典型性を失いつつある。結婚せず同棲のままの親を持つ子は、とくに北欧では珍しくないし、極端かもしれないが、ゲイの家族の中で子どもが育てられている例もある。

日本でもシングルを通す人たちが増えてきており、意思的に子どもを持たない夫婦（チャイルド・フリー）、ディンクス、高齢世帯や高齢者の一人暮らし、さらに日本的な家族形態である父親の単身赴任や、形だけの家族（家庭内離婚）も増えつつある。

伝統的で、保守的で、変化を嫌い、それゆえその中に生活するメンバーを長い間安全にまもってきた「家族」が揺るぎ始めたのは、

いつからだったのか。女性が自立した存在であることを主張し始め、わが国でも夫婦別姓問題が最近話題になってきている。

『モノグラフ・小学生ナウ』では、4回目を迎える国際比較調査のレポートであるが、今回は国際家族年でもあり、この2年間に行ってきた世界の5つの都市の「家族」の問題について、子どもの側からの調査結果を掲げる。

表1に調査地域と調査時期を掲げた。また表2にサンプル数を掲げてある。対象都市は上海、ソウル、ロンドン、ニューヨークで、日本については、東京に札幌、千葉、名古屋、岐阜のデータを合わせ、総称として「東京」を使用した。対象児は全て小学5年生で、総計は4,964人となっている。

表1 調査対象地域・時期

都市名	調査時期
東京*	1993年5月～7月
上海	1993年5月
ソウル	1993年10月
ロンドン	1994年1月
ニューヨーク	1994年3月

*東京に札幌・千葉・名古屋・岐阜を合わせ、総称として「東京」を使用。以下同。

表2 サンプル数

(人)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク	全体
男子	899	369	472	271	505	2,516
女子	895	404	449	244	456	2,448
計	1,794	773	921	515	961	4,964



●上海)))

最近、開放政策に転じた中国では、経済的な側面を中心にライフスタイルが大きく大きく変わろうとしている。ひと昔前のように人民服に身を包み、質素で化粧っ気もなかった女性たちの姿はどこにもなく、思い思いの服と化粧をして、軽やかで楽しげな若い女性の姿が町に溢れている。社会主義の国という重苦しいイメージを想像して行くと、拍子抜けする。人民服を着用した人々を探そうとすれば、退職した公務員の男性が街角の大きな木の下に集まり、日中から将棋をさしている姿を見つければいい。そこだけに古い中国がある感じがするが、その光景は周囲にとけ込んでいない。それ以外では年輩の人でも、めったに人民服を見ることはできない。訪れる度に町も人も明るい彩りに変わっていくばかり

だ。とくに大阪にも似た経済都市・上海では、人々は豊かになるために懸命に働き始めており、発展への活力が感じられる。

よく知られているように近年の中国は、厳密な一人っ子政策をとってきている。また社会主義の国として男女平等が推し進められ、100%近い共働きが行われており、また夫婦別姓の社会でもある。そうした意味で、親子や家族のあり方には、おそらく特徴的なものがあるに違いない。また保育所の役割をも果たす学校の姿や、一人っ子社会を背景に、少年宮（P. 15参照）を中心にしたおけいごとの過熱も特徴的である。むろん科学の伝統も根づいており、いっそう激化した学習競争が展開されているとも聞く。

1) 一人っ子政策の徹底と緩和

この「多子多福・無子絶後」の思想の国は、早くから増えすぎの人口への懸念が示されていたにもかかわらず、その対策に失敗した。

1979年には一人っ子政策が開始され、都市部では100%に近い（少数民族と第1子が障害児を除く）政策の徹底だが、働き手の必要な農村部には相当数の闇っ子（戸籍のない子）がいるといわれる。

それでも現在の人口は12億人を超えると推定されている。親心を考えると、外部者としてはこの政策にさぞ不満も多いかと思うが、人々に聞くと「仕方がない」という答えが返ってくる。もし政策がゆるんで、もっと子どもが生めるようになったらどうするか、と人々に尋ねても、「子どもを育てるのは大変、老後は子どもに期待せず、自分たちで生活する」と言って関心を示さない。次第に、1人しか子どものいない状態が普通のことになってきているのであろう。その結果、それぞれの家庭では、家族の代表選手としての子どもに、多大の期待をし保護が与えられている。

上海市では、1980年代から各家庭に「一人っ子」の要請がされ始め、1983年からは、さらに厳しい措置が実施されるようになった。

2) 教育の過熱

上海市（13区）の大学進学希望者は、親の期待も含め、ほぼ全員に近いと推定される。中学生の70%が高校へ、30%が専門学校と技術学校へ進学し、高校生の30%が大学へ進学する。すなわち21%が大学進学者であるが、大学といっても重点大学（設備と教員の質の高い大学）に入れる者はごくわずかである。ほぼ全員が大学進学を望む状況の中で、8割は望みがかなえられないという競争率の高さは、まことに厳しい状況を作りだしている。

大学入試以前にも、レベルの高い重点中学への進学が難しく、入学定員は各学校の各ク

ラスに割り当て制となっている。筆者の訪問した上海市のある小学校の担任は「自分のクラスの子どもは50人だが、昨年16人だった合格者が今年はわずか6人の予定だ」と述べ、別の小学校の担任は「昨年はクラスの7%だったが、今年はさらに下がって5%の予定」と肩を落とした。6月には、全国的に昇級試験があって、クラスで1人くらいは落第もするのだという。

中国では近年、子どもに楽しく生き生きと学習させる教育方法「愉快教育」（北京では快樂教育）に関心が深まっており、視聴覚を取り入れた教育方法の改善と共に、子どもの学習時間の負担を減らすためのカリキュラム改訂が進められている。3、4年前から進められている「子ども時代を子どもに返そう」の運動がそれで、北京などで「子どもに学習の負担がかかりすぎる」という調査結果も発表された。上海市でもまず1993年に1年生から新しいカリキュラムが試行され、順次上学年に対象を広げる予定と聞く。

教育改革の内容は、家庭に対しては宿題以外の勉強をさせないように要望し、出版社には生徒の負担となるような参考書類を出版しないように要望している。学校では、授業内容を精選し、教科書を改訂して、授業時数を減らす施策がとられようとしている。

計画としては、毎日授業を90分（2時間）減らし、従来の1日6時間を4、5時間にす。すなわち勉強は午前中だけ、午後は活動の時間に当てる方針で、教育方法も視聴覚などを取り入れて改善しつつある。そのため指導要領には、「教えても教えなくともいい」領域が指定されたが、実際は受験のことを考えて教師は全部教えるであろうから、実効はないのではないかとの見方もある。

以上の運動に対して教育関係者は、従来は点数と進学率だけの競争だったのが、真の実力をつける教育、個性を伸ばす教育に転換しようとしていると指摘する。この辺はどこか「新しい学力観」の発想と通じるものがありそうだ。将来は大学入試の内容も変わるとい

う予想があり、この40年間で最大の教育改革だという指摘も聞く。

3) 男女平等社会

中国は女性も100%働く社会である（最近では上海などの経済都市で個人商店を営む家では、専業主婦も出てきていると聞くが、まだ例外に近い）。若い世代は男性も家事を平等に分担する。古い世代も妻は「洗濯と料理」を、夫は「買い物、窓ふき」など力仕事を分担するという家が多い。現地の人によると、中国ではもともと南の男性は家事をする傾向があったが、北の男性は家事をしなかったという。しかし今は家事をしない男性は、周囲から「怠け者」と見られ、評判が悪いとか。

しかし経済力の上昇や自営企業の増加によって、今後は主婦の専門化もある程度は進むかもしれない。

女性が100%働くことを前提にして、保育制度は整っている。幼稚園は、日託（デイケア）と長託（寄宿制）に分けられる。日託でも朝昼晩の3食の給食がある。

小学校では、3時の終業後5時半まで学校に残って、おけいごごとに近い活動をする子どもも多い。クラブは日曜日も開設されている。親子が共に利用できる、朝の給食室を持つ学校もある。

4) 第2職業に励む

1992年の春から「改革・開放加速」の方針が打ち出され、あらゆる経済活動が活発化した。全国的に国营企業職員の「第2職業」が解禁になり、人々は本業以外の収入をはかっている。現在1家族が月に要する生活費は約600~1,000元といわれ、比較的高収入の運転手ですら月給600元といわれる中で、その差額はこうしたアルバイト活動で賄われていると考えられる。上海は今「全民経商（国民全体が商業を営む）」の状況下にある。

5) 狭い住居

兎小屋ならぬ「鳩小屋」という言葉も使われるほど、都市部での住宅事情は悪い。売り出されている個人マンションも、3LDKの高級マンションは40、50万元もする。しかし中国では、農民が土地を離れることを制限しており、「市街部戸籍」「郊外部戸籍」がある。「外郷人」に、かなり労働力を依存している現状があるが、それが住宅事情、交通事情をいっそう悪化させているようだ。

交通手段は自転車とバスで、朝はおなじみの自転車隊の通勤の姿がある。子どもを乗せている自転車もあり、雨の日は合羽を子どもにかぶせて、カンガルーを彷彿とさせる姿が見られる。朝晩のラッシュは、とにかく猛烈だ。

6) ランクづけられた社会

教師には「高級、1級、2級（新卒）」のランクがある。子どもにも「優等生」の表彰制度や、全市的規模での「優秀クラス」の選定があり、さらに全国規模での「少年先锋队」の制度がある。地域には「居民委員会（町内会）」があり、ここでは高齢者が熱心に衛生思想や道徳の涵養にPR（壁新聞）活動をしている。

7) 一人っ子に対する「過保護と期待」

「文化大革命（1966~1976年）は10年間だったが、その余波がその後10年間も続き、今の親はその期間に成人した人々で、子どもへの期待がとくに強い」と教育関係者は説明する。

もともと「望子成龍」の語があった国であり、それが一人っ子政策の中で、いっそう拍車をかけたということであろう。少年宮でのおけいごごとに、毎週工場を早退して付き添う父親や母親の姿を見ると、もし子どもが親の期待に添えなかったときは、どうなるのか

と心配になる。

低学年でも授業時間が長く、宿題が多く、親の教育要求が強いので、宿題の量を抑制するように教育委員会の通達があり、1、2年生は宿題はなし、3、4年生は30分程度、5年生は45分程度に要望されているが、実際はもっと出している。とくに1年生と（進学のため）5年生の親の要求が強い。親の教育要求としては、学校は「子どもにもっといい成績を取らせてほしい、厳しい指導をしてほしい」等である。

10年前から英語も始まり、3年生から会話の授業、5年生からはテキストを使って週4時間実施されている。放課後は毎日、3時から5時半頃まで学校内クラブ活動があり、半数くらいの子どもが利用している。児童の支払う月謝の40%くらいが講師の収入となるシステムが多い。学校でのクラブ活動は、少年宮ほどレベルは高くないが、一部外部講師も呼ぶなどしている。マラソン、水泳、舞踊、

カメラ、合唱、書道、絵画、船のモデル作り、英語、ワープロなどのクラブがある。学校はその後、5時半から8時まで、幼児を主とした「けいごと」教室にかわる。

北京に発した少年宮は中国全土に広がっており、学校外教育の機関として位置づけられていて、土日、長期休みも開館している。芸術や科学を中心に、学校のクラブ活動より高水準の教育をする。また、親たちからの放課後の自由時間の遊び場の要求にも応えるもので、子どもの楽しみの場として、遊園地にあるゲームセンターのような部屋もあるが、全体としては芸術と科学技術活動が中心で、官営の「大おけいこセンター」といった感じである。設備は充実しているし、学校のクラブ活動よりレベルが高い。母親が送り迎えし、教室の終わるのを待って外やホールの隅で編み物をしたり、おしゃべりをする風景も見られる。会社を早退したらしい父親に連れられてくる子の姿もある。

●ソウル)))

1) 専業主婦が多い社会

韓国については「近くて遠い国」という印象が強い。隣接している社会なのに、未知の国という気持ちを抱くことがある。

韓国についての感覚は、韓国を何回くらい尋ねたか、あるいは、韓国の友人を持っているかなどで異なってこようが、韓国通といわれる人の中に、韓国には日本で崩れた儒教文化が今も残っていると指摘する人が少なくない。

もっとも、現代の韓国を儒教思想を基本とした社会といえるかについては疑問が残る。確かに韓国の家庭に招かれて食事をとると、父親の権威を感じる。父親が手をつけるまで家族は食事をとらない。父親の前では家族は

喫煙をしないし、飲酒を控える。また、新しい料理がくると、まず父親が箸をつける。そうした雰囲気浸っていると、かつての日本の家庭に戻ったようななつかしさを感じる。

しかし、韓国は大きく変わりつつある。とくにソウルでオリンピックが開催された頃から、韓国は国際的に開かれた感じになった。その中でも若い世代の変化は著しく、ソウルのミョンドンなどを歩いていると、腕を組んでいる若い恋人たちを見かける。現在の日本では慣れてしまっているが、男女の交際に厳しいソウルでは、10年前には考えられなかった光景だ。それだけに古い世代の間では、韓国固有の伝統が失われるという危機感が募っているという。

何度か韓国を訪問するうちに、日本と韓国とのそうした親子関係の共通点と違いとを、

具体的にデータを通して分析してみたいと思うようになった。

この『モノグラフ』では、小学生の調査結果を紹介しているが、以前、子ども調査と並行して、中学生を持つ母親を対象とした日韓の比較調査を実施したことがある。その中から、子ども調査に参考となるいくつかの結果を紹介してみよう。

まず、母親の職業を調べると、以下のようになる。

	東京		ソウル
①専業主婦	29.1%	<	43.4%
②パートタイマー	31.8	>	4.9
③フルタイマー	19.2	>	18.2
④その他	19.9	<	33.5

つまり子どもが中学生になっても、専業主婦が4割を超えるのが韓国なのに対し、日本ではパートタイマーとして働いている母親が多い。日本でも専業主婦が女性の望ましい生き方といわれた時期があった。しかし、現在ではパートで働く母親が多いのは身近に見聞きする通りである。ところがソウルでは、専業主婦の生き方に現在でも強い支持が集まっているというデータである。

それでは、韓国の母親にどうして専業主婦が多いのか。母親として、子どもにどういう配慮をしているかについて尋ねてみた。

	東京		ソウル
①夜、外出しないように	63.5%	<	84.5%
②栄養のバランスをとる	59.7	>	47.8
③テレビの音を小さく	29.0	<	64.5
④子どもが勉強中は寝ない	21.3	<	37.8
⑤成績アップを神に祈る	6.9	<	39.1
⑥家事手伝いを免除	5.8	<	16.6

(「いつも」+「かなり」している割合)

「夜の外出を控えている」のは日韓の母親に共通している。しかし、韓国の母親は「子どもが勉強をしているときはテレビの音を小さく」しているだけでなく、「子どもが勉強をしている間は寝ずに起き」「家事手伝いを免除」して「成績向上を神や仏に祈る」などの心配りをしている。それに対して日本の母

は、「食事の栄養のバランスをとる」のが特徴的な行為になる。そして全体として、東京の母親よりソウルの母親の方が、子どものことに心配りしている割合が多い。

2) 進学競争の影

韓国というと受験競争の激しさで知られる。1993年の秋、韓国を訪れたとき、受験競争の緩和政策が実施されていた。高校生といえば夜9時すぎまで学校の図書室で勉強し、そのあと読書ルームに通って夜中まで受験勉強をする。高校生のそうした受験勉強が長い間定着していた。というのは、受験があまりに過熱しているの、1980年に現役生徒の学習塾や予備校通い、そして家庭教師を雇うのを禁止した。その結果、高校で補習する形が一般化し、夜の9時すぎまで教室で自習するのが高校生のごく普通の生活だった。それと同時に、町の学習ルームともいえる読書室が普及し、自習を終わった生徒は読書ルームでさらに受験勉強に励む。

ソウルでは、家で寝ているようでは一流大学へ入れそうもないという言い方をする親が多かった。それでもソウル大や延世大、高麗大などへの進学を望む気運が強い。そのため大学の入試制度の改革を試み入試科目を減らし、大学による入試の多様化を認めると同時に、中・高校生の学校での自習を禁止することになった。もちろん、そうした改革は学歴社会を残したままの小手先の改革なので、受験熱を潜在化させるだけで問題の解決になりにくいという声も少なくない。

ソウルで母親から教育についての話を聞く機会を設けた。できることなら、わが子をソウル大学などに進学させたい。一流大学を出れば、明るい将来が約束される。そのためには、母親が家庭にいて子育てに専念した方がいい。仕事を持っていて後で後悔するよりも子育てに全力を尽くしたいと、母親たちは異口同音に語っていた。

小学生の子どもを持つ母親は「朝、子ども

を起こし、英語のカセットを聞かせる。英語が話せることがこれから先、必要になると思うので英語の早期教育をしている。その後、算数や国語のドリルをさせる」「子どもが帰宅する頃、おやつを作り、食べさせてから、ピアノのおけいこに通わせている。週2回のピアノの他に、スポーツクラブに3回行っている」「男の子なので、将来はソウル大学に進学し、外交官になってほしい。それには学力だけでなく、体力や情操面にも配慮したい」という。「おけいこから帰ったら、宿題をすませ、自分が子どもの勉強を見る。テレビは夕方の1時間だけで、時間があつたらなるべく本を読ませるようにしている」とも語っていた。きめ細かく対応しながら、家庭学習のプログラムを用意しているようで、母親たちの熱心に驚かされた。

先ほどの設問項目にあったような「子どもが勉強している間は寝ない」や「子どもが勉強しているときはテレビの音を小さくする」「成績向上を神に祈る」などは、聞き取りのときに母親たちが話してくれた内容にヒント

を得て作成した項目である。

母親たちは子どもたちにより学歴をつけることが何より大切と考えて、夜も寝ずにがんばってきた。母親たちに子どもに対する学歴期待を尋ねてみると、大学進学を望むのは東京=76%、ソウル=95%のように、日韓ともに大学進学を望む者が多いが、中でも「入るのが難しい大学」進学を望む母親は東京=13%、ソウル=39%と、わが子の難関大学進学を期待する者は韓国に多い。とにかく、わが子に難関大学の突破を望む母親が4割に迫っている。

何よりも多くの韓国の母親が、「現代社会では高学歴者が優遇されている」(ソウル=47%、東京=25%「とてもそう思う」割合)から「財産を残すより子どもに学歴をつけたい」(ソウル=49%、東京=10%)と考えている。

日本では高学歴化が進みすぎ、学歴が機能を失い始めている。それに対し、韓国は高学歴取得がものをいう社会で、それだけに、学歴取得競争が厳しさを増すのであろう。

● ロンドン)))

1) 概況

英国とその首都ロンドンには、われわれ日本人にとって遠くて近い国、あこがれの国である。今世紀初頭、夏目漱石が留学した時代から文化人の心を引きつけてきた。アメリカのようなダイナミックさや派手さはないし、パリのような華やかさもない。どちらかというと地味な国である。緯度からいうとほぼ樺太に匹敵するが、大西洋を流れる暖流のおかげで樺太ほどは寒くない。しかし長い冬は暗く湿っていて、ターナーの描くどんよりとした厚い雲が立ちこめている日が多い。それでも

日本人が親しみを抱くのは、遠く離れていながら日本と共通する点が意外に多いからだろう。例えば、国民の象徴としての王室があること。そして王室に対する国民の関心は高く、よい意味でも悪い意味でもメディアには話題を事欠かない。例えばウィンブルドンのテニス大会決勝に毎年臨席するケント公妃。優勝者を祝福する前にボールボーイたちに親しく語りかけ、労をねぎらう姿は、そのまま国民に対する親しみをあらわしている。ここ4~5年はチャールズ皇太子とダイアナ妃の不仲が国民を落胆させているが、これも欧米社会で確実に進行している夫婦と家族の解体を象徴している。

もう一つの共通点は、日本も英国もユーラシア大陸に突き出た島国である点だ。両国とも歴史的に大陸との縁は切っても切れない関係であるが、海峡を隔てているために独自の文化を生み出し、外部とは一線を画し、容易には受け入れようとしない頑固さ、いわゆる島国根性のようなものが共通して感じられる。英国を旅したことのある人の多くは、入国の際の審査の厳しさに辟易した経験を持っているだろう。ヒースロー空港やガトウィック空港に到着すると、EC以外の国の人たちは入国審査で長蛇の列を覚悟しなければならない。1人ずつ官吏に呼ばれ、入国目的や職業などをしつこく聞かれる。目的がはっきりしないために入国できず、立ち往生したり強制退去させられる例もたびたび耳にする。日本でも外国人にとっては同じような光景が成田でくりひろげられているのであろう。それに比べればドイツ、フランス、イタリアなど大陸の国では入国や出国の際、パスポートは用意するが、短期の滞在であればほとんどフリーパスである。地続きであるから、出入国を厳密に管理することは実際上不可能なのである。

2) 排他性と親密性

そのような排他性が英国の国民性にもあらわれている。同じ英語を母国語とするのに、開けっ広げで陽気なアメリカと比べると、何と異なることか。保守的で恥ずかしがり、外部からの人たちにも一見礼儀正しく紳士であるが、自分のプライバシーと独立を大切に一定の線以上はとけ込もうとしない。それを乗り越えて親しくなればとても親交に熱い人たちであるが、一見とっつきにくいところも日本人とよく似ている。

このような外部に対する排他性は、裏返せば内部に対する親密性につながる。イギリス人たちは、家族と過ごす時間を実に大切にす。アフターファイブは家族との時間であり、5時をすぎても居残り職場にいることは、よっぽど要職にあって忙しい人か、あるいは

自分の時間の使い方が下手な人のどちらかともみなされる。

イギリスの夏は短い、夏時間を採用しているうえに、緯度が高く、日照時間がぐんと長くなるので、皆が5時すぎに帰宅し、食事をして、遅いときには9時ぐらいまで明るい時間を、家族と共に過ごすことを楽しみにしている。家族が連れだって散歩に出かけたり、スポーツを楽しんだり、実にゆったりとした時間を過ごしている。

3) 家族の問題

しかし、そのような表面的な家族の親密さとは裏腹に、欧米各国に共通してみられる家族の崩壊は深刻である。公園やスーパーマーケットに行くと、父親が子どもと連れだって歩いている姿をよく見かける。一見ほほえましく見えるが、実は単身家庭であったり、妻と離婚したため別居している子どもとの久しぶりの再会であったりする。

今回の調査を依頼した学校の校長先生の話では、子どもたちの実の両親がそろっている家庭は半数にすぎないという。しかもこれは、その学校や地域の特殊事情ではない。英国や他のヨーロッパの国々では、もはやあたりまえのことになっている。

そのような話をわれわれ日本人が聞くと、家族の崩壊が子どもたちの生活にさぞかし暗い影を落としているのではないかと想像してしまう。しかし、その校長先生の話はこうであった。「確かに両親の関係が難しく、争いが耐えないときや、離婚のことでもめているときなど、家庭が落ちつかないと、学校での子どもたちの生活にも影響してくる。しかし、子どもたちにとって親の別居、離婚や再婚は、ごくありきたりの出来事で、友人たちとも普通に話すことができるし、特別なことではない。実の両親がそろっていないことが、特別問題であったり、非行や成績不振などに直接結びつくことはない」とのことである。

4) ミルトンケインズについて

さて、今回の調査は、ロンドン郊外のミルトンケインズという人口20万ほどの街で実施した。ロンドンからはグラスゴーに向かう国鉄本線、あるいは高速道路で約1時間で結ばれており、ここからロンドンに通勤している人もかなりいる。

英国は「平均的」という概念が、あまり意味のない国である。ごく少数の上流貴族階級は別にしても、国民は中流階級と労働者階級に分断されており、職業も生活のスタイルも話す言葉のアクセントも皆、大きく異なる。したがって、その両者の中間をとっても平均的なイギリス人の姿は見えてこない。

同じように地域差も大きく、例えばイングランド北部のヨーク地方と、ロンドンの南のケント地方、ウェールズの首都カーディフでは、人々の暮らしはほとんど別の国であるといっても過言ではない。

このように多様性を前提とした英国の中で、ミルトンケインズは比較的「平均的」な都市ということが出来る。なぜなら、ここは1976年に政府主導で産業振興のために新しく作られた街だからである。日本でいえばさしずめ、つくば市の研究学園都市に相当する。しかしそこまでは研究や学問に指向していない。むしろ新しい産業の振興に力を入れており、日本の企業も多数参加している。市街地は広々としていて、その間を道路が機能的に結んでいる。典型的なイングランドの町並みとは趣がだいぶ異なり、むしろアメリカの広大さを彷彿させる。それまで広野だったところに全国から人々が移り住んできたので、地域的なバイアスはなく、労働者階級と中産階級が適度に混ざりあって、新しい都市を形づくっている。

5) 教室の中で

今回の調査では、十分な人数を得るために、

10校もの学校に依頼した。これは日本などと比べると英国の小学校は、一つ一つの学校が小規模であることによる。今回の学校は、1学年がだいたい60人程度、多くても90人ほどであった。これは、子どもたちの通学距離をできるだけ短くしようという配慮と、校長先生が子どもたち全員の名前と状況を把握していなければならないという原則による。

ある学校では、校長先生が自ら案内役で教室を回ってくれたが、教室に入ると気軽に子どもたちに名前を話しかけ、子どもたちも笑顔で親しく応えていた。

英国の学校では、校長の権限が大きい。最近、中央政府から統一したカリキュラムが提示されたが、以前はカリキュラムも全く学校に任されていたし、現在でも学校の運営方針や授業科目など、かなりの部分で各学校の独自性が認められている。今回訪問した学校を比べてみても、宿題を全く出さない学校もあれば、日本の小学校と同じようにひととおりの宿題を課すところまで実にさまざまだ。

しかし、どの学校にも共通してみられた特徴は、教師と子どもたちが対座して、机をきちんと並べて教師の話を子どもたちが聞くという、いわゆる一斉授業がほとんどみられなかったことだ。中にはそういう昔ながらの授業も行われているときもあるという。しかし大部分は、プロジェクトと呼ばれる子ども一人一人の、個別の活動を中心とした自由な雰囲気での授業風景であった。

たまたま訪れたクラスでは、もうじき行われる町のお祭りに参加するためのプロジェクトを進めていた。子どもたちは丸い大きな机をグループごとに三々五々に囲み、ある子どもは町の歴史を調べ、別の子どもはお祭りに参加するための費用を計算し、となりのテーブルではパソコンを使って学校新聞のイラストを作っているという具合だ。

先生は子どもたちの間をまわり、個人のペースに合わせた指導をしている。イギリスでも1950年代以前は、日本と同じような一斉授業が広く行われていた。ところが、1950年

代の末から60年代にかけて、小学校教育に大きな変革が起きて、一斉授業から現在のよう形態になった。しかし、このような子どもと教師の自主性に任せた授業形態にも批判がないわけではない。授業の成果が教師の力量によって大きく左右するし、読み書きや計算などの基本的な学習能力の面では、従来の方法に比べて必ずしも効果は上がっていない。

しかし、プロジェクト方式がこれだけ浸透した今となっては、もはや旧来の型にはまったやり方を子どもたちに押しつけようとする考え方は少ないようだ。

訪問したあるクラスでは、子どもたちがわれわれのために、休み時間を潰して教室に待機してくれていた。子どもたちに「将来何になりたいか」という質問を投げかけてみた。子どもたちの手がさっと挙がり、私に指名してもらおうのをじっと待っている。サッカーの選手、医者、バイクのライダー、助産婦、などなど。そこには将来の姿を夢みる、万国共通の子どもたちの姿があった。とりわけ、空軍のパイロットになりたいという女の子の、輝いた目がとても印象的だった。

● ニューヨーク)))

1) 「家族が何人」は答えにくい

親子関係についての調査を、アメリカで行いたいと考えた。アメリカは若い頃からの憧れの国なので、機会を見つけては訪ねていた。そのうちに、きちんとした形で日米の親たちの意識の違いを比較してみたいと思うようになった。

とりあえず粗い項目を用意して、調査の可能性を検討してみようとした。それには、子どもたちに話を聞いた方がよいと考え、手づるを頼って、ボストンの学校でプリテストを行うことにした。今回は第4回の比較調査だが、1987年の第1回国際比較調査を実施したときの話である。

用紙を配ってすぐに、子どもから手が挙がった。聞いてみると、「家族は何人か」という質問が答えにくいという。意味がわからないので、事情を尋ねてみた。

父と母が離婚し、彼は父と同居している。父は2人の子のある人と再婚しているが、母親も1人の子どもを連れた男性と再婚し、そこに妹も同居している。つまり彼の、現在の家族は5人である。しかし、彼は妹と母を加

えた元の4人を「僕の家族と考えたい」という。かわいそうに思い「君の考えている通りに答えていいよ」と返事したら、「4人」と書いて、うれしそうな顔をしていた。すぐに別の子から手が挙がった。父と母が離婚し、一人っ子の彼の父は若い女性と再婚し、母は3人の子持ちの男性と暮らしている。彼は平日は母と暮らし、週末は父の許に引き取られる。となると、平日と週末とで暮らす家庭が異なっているので、確かに家族が何人と聞かれても、子どもたちは答えにくいように思う。

次のクラスでも、家族についての質問が殺到した。その結果、多くの子どもたちが親の離婚の影響を受け、さまざまな形で悩んでいることを知った。それと同時に、とかく離婚を問題にしがちだが、再婚や再々婚で家族が複雑になるところが問題を深刻化していることを知った。

もちろんそれまでも、アメリカで離婚が多いということは見聞きしていた。アメリカの友人の何人かも離婚をしている。しかしそれは、おとなの世界の話で、離婚というものを子どもの立場から考えたことはなかったのである。

その後、シアトルやロス、ニューヨーク、

サンフランシスコと、いくつかの都市で調査を重ねた。そして、離婚の割合は人種や地域などによって異なるが、それでも、小学生の3~4割が親の離婚を体験しているのを知った。

子どもたちに具体的な話を聞くと、「母親が離婚して、母親の許にいるが、1か月前から知らないおじさんが泊まるようになった。でも僕は、あの人を父と呼ぶ気はしない」とか、「週末になると新しい父親の子どもが2人遊びに来る。あの子たちを家のメンバーと考えていいか悩んでいる」などが語られる。とにかく、いろいろなタイプの家族が出てくるので、家族の話をまとめるのに手こずった覚えがある。

現在では、少なくとも欧米を想定した場合「親とその子ども」が暮らす家族の形は少数派になってしまった。結局、子どもたちには家族の人数は血縁とは関係なしに、「朝、起きたとき、家で何人の人が寝ていたか」の人数を記入してもらうことにした。

2) 母親のことを聞いても無駄

80年代に入って、アメリカの映画は家族を扱った名作が続いた。それと共に、普通の映画に登場する家族が、伝統的な家族の形をとっていないのに気づく。

家族問題をテーマとした「マイ・スイートファミリー」(原題は「ステップ・キッド」=継子)は、女性問題を扱った「フライド・グリーン・トマト」と並んで、PTAなどの関心を集めた秀作といわれている。一人娘の家出が主題だが、主人公の家族は父母が離婚し、父は別の女性と結婚して1人の子をもうけ、さらに別の人との間に双子が生まれる。母は3人の子持ちの男性と再婚し、1人の娘を生んだ。

一度聞いただけではわからないくらいの複雑さだが、主人公の子は元の夫婦の許では一人っ子だが、父か母のいずれかと血が通っている「ハーフ」の兄弟を含めると5人兄弟に

なる。これに、連れ子の「ステップ」が加わると8人兄弟になる。さらに、義父、あるいは父の連れ合い、そして父の恋人などのおとなたちが、家出した娘の行方を心配するというストーリーである。アメリカの多くの人にとって、いかにも身近にありそうな話で、身につまされて映画を観ていたであろう。

この映画に限らず、ここ数年の間に、筆者の観たアメリカ映画をB級映画に近いものを含めて思い出すと、「ステラ」は離婚した母と娘の話だし、シュワルツェネッガーの「キングダートン・コップ」は、離婚した刑事が離婚した女性をエスコートするというストーリーだった。シャチの芸を背景として、自然愛護関係者からの支援を得た「フリー・ウィリー」に登場する少年は、母親から見捨てられたストリート・キッズだった。また「ミセス・ダウト」は、離婚はしたが子離れのできない父親の姿を扱っている。

いずれにせよ、アメリカ映画では、家族の崩壊を取り上げながら、それだけに家族の絆の必要性を訴えようとしているものが多い。「ゴースト」は死んだ恋人が最愛の人を守る話だし、「フィールド・オブ・ドリームス」は見方によると、父と息子との心の通い合いをテーマにしていた。「ダンス・ウィズ・ウルブス」は、スー族などの古き良き時代には家族のふれあいがあったが、それを壊したのは白人たちだという映画である。さらに「わが心のボルチモア」は、東欧からの移民が、現代に近づくにつれて家庭の絆が薄れていく様を描いた映画だった。

もう一度、調査の話題に戻ろう。子どもたちからのヒヤリング結果をふまえて、調査票の原案を作成し、教育関係者に目を通してもらった。そして、いくつかの項目がアメリカの事情になじまないという指摘を受けた。ところが、指摘を受けた項目が予想外だった。

具体例をあげるなら、「あなたはお母さんが好きですか」をはずしたほうがよいという。つまり「お母さん」といったところで、半数近い子どもが親の離婚を体験しているから、

実母と暮らしている子もいるが、ステップ・マザー（継母）の許にいる子も多い。もちろん、世話をしている人が父親と同棲している女性ということも考えられる。さらに、本人が養子縁組で家族の一員になっていることもまれではない。最近では、ホモの家族が市民権を得て、子どもを養子縁組みしている場合もある。そうすると、子どもが「お母さん」という言葉でイメージしているのが誰か、特定できない。とって、「あなたがお母さん」という言葉で連想したのは誰か」などと、実母か継母かと、こと細かに尋ねるのはプライバシーの侵害になろう。それなら、そういう設問は避けた方がよいというのが先方のアドバイスだった。

言われてみるとその通りだが、同じようなことが父親についてもあてはまるので、「大きくなったら父親のようになりたいですか」の設問も削除することにした。

結局、父とか母とかを尋ねずに、「あなたの帰宅が遅くなったら、親たち（Parents）は心配しますか」とか、「あなたの家はみんな仲がいいですか」の形の設問を試みることにした。

こうした過程を経て作られたのが、今回の調査票である。日本の感覚からすれば奇妙に感じられるかもしれないが、考えてみると、われわれが「家族」という言葉で連想するのは父と母、そして子どもを中心とした核家族

の姿であろう。これに、時として祖父母を含めて血のつながった人間関係を家（いえ）にとらえることも多い。

もちろん欧米でも、肉親の親子から家族が成り立ち、そうした関係を大事に人々が暮らしていたことがあった。しかし現在では、家族を「夫婦と血のつながった子ども」としてとらえるのは無理になりつつある。夫が2人の子持ちで再婚で妻が初婚、それに養子縁組の子が1人。あるいは「クレイマー・クレイマー」に登場する父と息子との父子家庭、時には再婚の子連れ夫婦の間に実子が1人など、いろいろな組み合わせが考えられる。

そうすると、家族とは何か。そして子どもはどういう意味を持つのかなどを考えてみたくなる。少なくとも、血のつながりという言葉の方は、アメリカの家庭にはなじみにくいように思われる。人々が共同して生活をする場が家族という感じである。

なお、今回、ニューヨーク市内での調査はさまざまな理由から実施できなかったので、市内のグランド・セントラル駅から電車で40分ほどかかるロング・アイランドの郊外の小都市コールド・スプリング・ハーバーで調査を実施することになった。イギリスを思わせるような静かな田園都市で、住民はほとんど白人、中流階層よりやや上という感じのする人々が多く住んでいる地域である。



今回の調査対象は、すでにみてきた5つの都市の小学5年生である。子どものいる家庭に限ってのサンプルであるが、子どもの家族とそこでの親子関係は、都市ごとにどのように違うのだろうか、また共通なのだろうか。

●家族のかたち)))

1) 家族のサイズと子どもの数

まず表3は家族の人数である。厳密な一人っ子政策をとる上海の場合は別として、どの都市も4人または5人家族が、家族の標準サイズのようなだ。しかし東京とソウルでは4人家族に集中する傾向がみられ、ロンドン、ニューヨークでは分散が大きい。例えば6人以上の家族は、ソウルで1割、東京では2割だが、ロンドン、ニューヨークでは25%かそれ以上である。

これには祖父母との同居というよりむしろ、子ども数の分散の差が反映していると思われる。表4によれば、一人っ子が93%の上海は別として、4人以上の多子家庭は、東京では6%と例外的だが、ロンドン、ニューヨークでは2割を超え、子どもにしてみれば、仲間の4~5人に1人が、4人かそれ以上の兄弟を持つわけである。基準が好きで、何でも他人に合わせてしまう日本に比べ、欧米の人々は、子ども数でも自分流の選択をするのだろうか。

ただし一人っ子は、どの都市でも1割弱と

ほぼ同様である。日本に比べると、欧米の子 定となる。
 どもたちのまわりには多くの子どもがいる勘

表3 家族の人数

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
3人以下	9.6	70.9	8.0	10.5	7.5
4人	43.5	14.6	55.6	33.2	35.4
5人	26.6	11.4	24.9	31.1	30.9
6人	12.6	3.1	8.0	14.5	12.8
7人以上	7.7	—	3.5	10.7	13.4

表4 子どもの数

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
1人	9.7	93.2	8.8	9.0	5.9
2人	54.0	4.9	60.5	35.3	39.0
3人	30.1	1.9	20.5	30.5	32.9
4人以上	6.2	—	10.2	25.2	22.2

2) 同居者

ついでに家族構成をみてみよう。表5によれば、祖父母との同居率は、生存率の高い祖母の同居率でみても、東京が最も高い。

東京>上海>ソウル>ニューヨーク>ロンドンの順となっていて、なかでもロンドンには2%と、祖父母との同居が例外的であること

がわかる。これは前回のスウェーデンの結果とよく似ている。

また父母との同居率をみると、母親とはさすがに95%を超す同居率で、子どものそばにはまず母親の姿があるが、父親の数字がやや違っている。どこも母親より同居率が低いのは共通だが、ロンドン、ニューヨークでは79%、85%と1割以上低い数字になっている。家族解体の深刻さを示す数字と思われる。

表5 同居家族

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
祖父	14.8	12.9	6.1	1.6	7.2
祖母	22.6	18.5	12.3	2.1	10.8
父親	94.0	93.3	94.7	78.6	85.1
母親	98.5	95.1	96.0	95.0	96.8
兄弟	89.4	4.7	87.7	89.5	88.6
その他	3.5	4.2	7.1	9.1	11.8

3) 母親の有職率

どの都市でも子どものそばには母親の姿があると指摘したが、しかしその母親も、今では男性なみに外で仕事をする人々が増えている。

ここでは母親の有職率をみてみよう。表6(図1)によると、専業主婦率はソウルが45%と際だって高い。今でも一部の人々を除いては、生活の必要に迫られていなければ、仮

に高い教育を受けても、子育てと家族の世話を献身するという儒教思想が残っているであろう。

上海を除く他の3都市の専業主婦率は、どれもほぼ3割である。有職者を見ると、ロンドン、ニューヨークが、東京、ソウルより1割かそれ以上高い。女性がしっかり働くだけの、家庭基盤や育児支援システムはどの程度整っているのだろうか。なお表7は、以上の結果をまとめたものである。

表6 母親の職業

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
専業主婦	32.6	2.4	45.3	30.0	29.1
パートタイム	18.0	2.9	6.4	18.5	26.1
フルタイム	17.5	92.1	20.7	31.8	29.3
店の経営	7.2	1.4	15.9	1.2	2.8
その他	24.7	1.2	11.7	18.5	12.7

図1 母親の職業

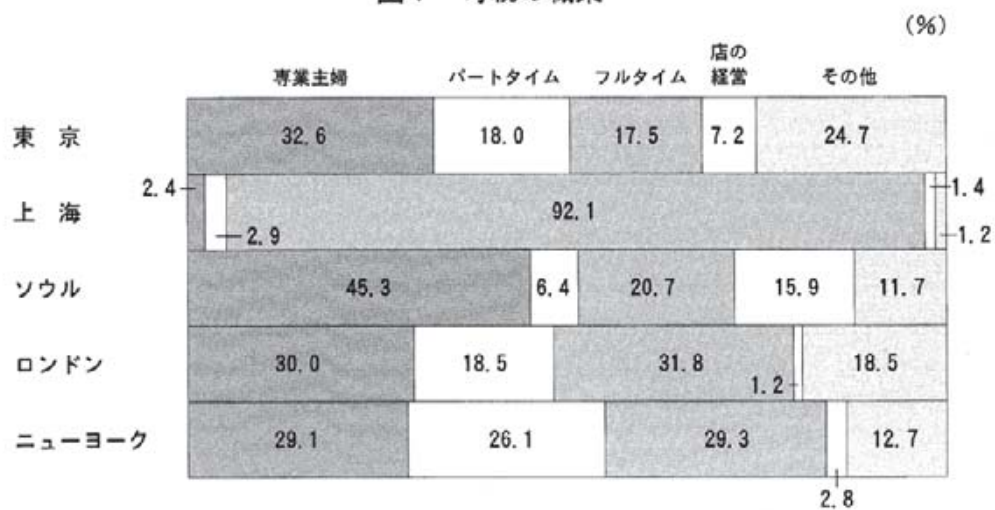


表7 家族のかたち（まとめ）

（％）

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
7人以上の家族	7.7	—	3.5	10.7	13.4
子ども数4人以上	6.2	—	10.2	25.2	22.2
父親同居率	94.0	93.3	94.7	78.6	85.1
祖母同居率	22.6	18.5	12.3	2.1	10.8
専業主婦率	32.6	2.4	45.3	30.0	29.1
フルタイム率	17.5	92.1	20.7	31.8	29.3

●家族の暮らし)))

—食卓からみた家族のまとめり—

1) 朝食

食卓に家族がそろるかどうかは、家族のまとめりをみる1つの材料であろう。また食事をどういう形でとっているかは、子どもが受けている配慮や保護の側面をも示す資料であ

る。

表8には、昨日子どものとった朝食の場所を示した。まず表の下部、「食べなかった」とする欠食率をみると、ソウルとニューヨークが1割を超えている。朝食抜きの登校は、日本でもひと頃問題になったが、ある種の子どもの保護の怠慢、または子どもの生活

表8 朝食の場所

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
自分の家	96.1	82.5	87.2	77.9	83.0
店で	0.6	7.1	0.5	1.6	0.7
学校で	0.1	5.6	0.7	20.5	3.1
その他	0.9	4.4	0.3	0.0	2.6
欠食率	2.3	0.4	11.3	0.0	10.6

表9 朝食の同席者

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
1人で	18.2	32.4	23.7	32.1	36.4
全員で	31.4	52.7	31.3	11.3	17.8
父親のみ不在	24.8	9.3	18.0	18.2	17.6
母親のみ不在	4.0	5.6	3.5	3.7	3.4
その他	21.6	—	23.5	34.7	24.8

リズムの崩れを示すものであろう。家庭が不安定で母親の就労率も高いニューヨークはわかる気もするが、ソウルの場合はよくわからない。

しかしロンドンの数字をみると、欠食がないのは、学校給食の用意があるためらしい。しかし1日2回の給食は、栄養は満たしても、子どもの精神的安定からいってどうだろう。

次に表9で朝食を誰と食べたかをみてみよう。子どもが1人で食事することを孤食と呼ぶことがあるが、孤食率は東京が一番低くて18%、次いでソウル(24%)<ロンドン(32%)

・上海(32%)<ニューヨーク(36%)となっている。

関連して、家族全員での朝食は、ロンドン、ニューヨークが1割台と低い。これは単なる文化の問題か、親の子どもに対する配慮の不足か、それとも親の忙しさからなのか。また日本に特徴的なのは、父親のみ不在の食卓が25%と多い点だろう。

さらに夕食について表10、表11をみると、朝食と違ってさすがに欠食する子は少ない。それでもロンドンで7%、ソウルで4%の子どもが夕食をとっていない。同席者では、ここでも東京で父親だけが不在の食卓が33%と

表10 夕食の場所

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
自分の家	91.4	91.9	90.9	87.1	85.6
店で	5.0	2.7	3.2	1.8	8.2
学校で	0.5	0.1	0.3	0.8	0.0
その他	2.7	5.3	2.0	3.5	5.2
欠食率	0.4	0.0	3.6	6.8	1.0

表11 夕食の同席者

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
1人で	4.8	2.7	9.9	8.2	4.1
全員で	47.0	80.9	45.8	42.4	64.7
父親のみ不在	33.0	12.3	26.0	19.6	18.5
母親のみ不在	1.5	4.1	2.8	3.1	4.1
その他	13.7	—	15.5	26.7	8.6

最大で、父親の家庭不在ぶりがみえている。また全員での夕食では、朝食で低かったニューヨークが65%と一気にね上がるのは、文化の問題として面白い。

最後に、週のうち全員がそろう夕食を聞い

てみると、ロンドンで「ほとんどない」が23%で、「週に1～2日」を合わせると、4割を超しており、東京の3割を大きく超えている(表12)。表13は、以上の資料をまとめたものである。

表12 家族そろう夕食

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
毎日	28.3	69.9	21.1	33.8	38.9
週に5～6日	15.7	12.9	28.9	15.6	30.2
週に3～4日	20.6	11.0	22.5	9.2	16.7
週に1～2日	22.5	3.8	14.4	18.2	9.6
ほとんどない	12.9	2.4	13.1	23.2	4.6

表13 食卓の状況(まとめ)

(%)

		東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
朝食	欠食率	2.3	0.4	11.3	0.0	10.6
	孤食率	18.2	32.4	23.7	32.1	36.4
	全員同席率	31.4	52.7	31.3	11.3	17.8
	自分の家での食事	96.1	82.5	87.2	77.9	83.0
夕食	欠食率	0.4	0.0	3.6	6.8	1.0
	孤食率	4.8	2.7	9.9	8.2	4.1
	全員同席率	47.0	80.9	45.8	42.4	64.7
	自分の家での食事	91.4	91.9	90.9	87.1	85.6

2) 睡眠時間

また表14は起床と就寝時刻、睡眠時間である。ソウルの子どもだけが目立って睡眠時間が短い。巻末の集計表によれば、他の地域で

10時半以降まで起きている子は2割以下だが、ソウルでは42%にも達しており、おそらく深夜まで勉強しているのであろう。これは第1回の国際比較調査の折にも、ソウルの睡眠時間が目立って短かったのと符合する。

表14 起床時刻と就寝時刻・睡眠時間

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
起床時刻	6時54分	6時7分	7時0分	7時8分	6時45分
就寝時刻	21時51分	20時30分	22時11分	21時31分	21時25分
睡眠時間	9時間3分	9時間37分	8時間49分	9時間37分	9時間20分

3) 空腹か

子どもが食事時に食欲旺盛かどうかは、栄養上の問題というより、背後に子どもの健康な暮らしや生活リズムがあるかどうかを示す数字と考えられる。夜更かしや過度の勉強時間、遊びや運動の不足、子どもの気持ちの張り合いのなさ等が、食欲不振と結びついていると考えられる。そうした点ではとくに朝食

の食欲に注目したい。

表15によれば、朝食では上海とソウルの子に目立って食欲がない。子どもらしいお腹のすかせ方は、「いつもとてもすいている」の数字をみれば、ロンドン、ニューヨークに大きく、東京がそれに次いでいる。

夕食は上海のデータがないが、ソウルでは「あまり・ぜんぜんすいていない」が4割近くもあり、2割弱の他の3都市と差がみられる。

表15 空腹か

(%)

		東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
朝食	いつもとてもすいている	10.2	2.9	7.2	17.7	16.4
	わりとすいている	39.3	25.3	22.2	37.8	31.7
	あまりすいていない	45.7	44.1	56.7	33.8	43.1
	ぜんぜんすいていない	4.8	27.7	13.9	10.7	8.8
夕食	いつもとてもすいている	30.9	—	16.0	37.7	39.2
	わりとすいている	52.4	—	45.8	42.5	41.1
	あまりすいていない	15.2	—	33.6	13.6	18.3
	ぜんぜんすいていない	1.5	—	4.6	6.2	1.4

4) 誰と寝ているか

小学校5年生といえば思春期にさしかかった時期であり、親からの自立が始まる時期でもある。親との距離とも関連して就寝状況を見てみると、表16に示したように、まだ親を主としたおとなと同室で就寝している子は、

アジア文化圏の特徴であることがわかる。上海の40%を筆頭に東京24%、ソウル23%と続く。一方、ロンドンとニューヨークではゼロに近い。こうした就寝状況の数字をみると、東洋と西洋の親子の関係には、文化の問題として、ある意味で本質的な違いのあることを実感する。

表16 誰と寝ているか

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
一人で	29.2	58.1	31.7	61.6	71.6
兄弟と	40.5	1.4	40.9	35.3	26.3
おとなと	24.4	40.0	23.1	1.2	1.0
その他	5.9	0.5	4.3	1.9	1.1

●自分の家はどんな家か)))

子どもは、自分の家族と家庭をどう受けとめているのだろうか。表17は7つの項目を用いて自分の家について評価させた結果である。

まず全体としては、どの項目でも「とてもその通り」に最大の分布があり、否定的な評価をする子が少ないのが特徴で、自分の家族に対する肯定的感情が見いだされる。そうした中で分布の山が落ちているのは「経済的に豊か」だけで、「わりとその通り」に最頻値がある。これだけは目で見える部分であり、主観的な判断の入る割合が低いのであろう。しかし経済の項目でも、ニューヨークだけは「とてもその通り」が53%で、後にもみられるようにアメリカの子どもの楽天主義というか明るい方向へのバイアスがみられる。

これを「とてもその通り」の数値をとってまとめてみたのが表18(図2)である。項目ごとに5つの都市の肯定率を比較して、1位2位と5位の印をつけてみた。さらに平均値を算出して、下部に掲げてある。順位と比較では、肯定的評価の高さはニューヨーク>上海がまず群を抜いて高く、次いでロンドン>ソウルの順で、残念ながら日本は最も低い。平均値をとっていても同様である。

国際比較の度に話題にされることだが、ア

メリカの子どもの何事につけてもみられる、自分や自分の環境に対して「素晴らしい」と肯定する高いトーンは、表現の問題なのか、それともアメリカ社会の楽天的な風土を反映するものなのか。それがここでも見いだされる。データとしては、高い離婚率や若すぎる結婚、未婚の母の増加、エイズの拡大など、決して安定した家庭に子どもが育っているとは思えないが、しかしなおかつ、表18(図2)には暗さの片鱗もみえない。とくに1位を拾えば「豊かで、食事がおいしくて、近所と仲よくつきあう」アメリカの家族の姿である。

同じく1位の項目を拾うと、上海は「家族が仲がよくて、お互いに助けあい、親戚とも仲がよくて、みんなが幸せ」である。平均値の数字では僅差で2位の上海だが、項目を検討してみると、上海には大きな家族のネットワークの中での幸せ感があり、家族としては一番基盤が深く安定している姿かもしれない。

その中では、東京の否定的評価が特徴的である。7項目の中で順位的に最も高いのは、「豊か」(2位)で、あとの項目はほとんど最下位である。

表17 自分の家の評価

(%)

		東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
経済的に豊か	とてもその通り	27.7	20.4	22.0	19.4	52.9
	わりとその通り	30.5	45.6	38.9	43.2	29.8
	少しその通り	27.6	21.9	23.7	21.6	10.9
	あまりそうでない	10.7	10.1	12.0	11.1	3.6
	まったくそうでない	3.5	2.0	3.4	4.7	2.8
食事がおいしい	とてもその通り	52.4	55.6	38.0	69.9	73.6
	わりとその通り	31.3	35.6	32.2	24.2	20.5
	少しその通り	13.4	7.6	19.3	4.3	4.1
	あまりそうでない	2.1	0.9	8.3	1.0	1.1
	まったくそうでない	0.8	0.3	2.2	0.6	0.7
家族が仲がよい	とてもその通り	40.8	82.3	53.1	52.9	53.5
	わりとその通り	28.0	12.3	28.7	29.8	31.4
	少しその通り	20.4	3.4	12.6	11.3	9.4
	あまりそうでない	8.1	1.5	4.7	3.4	4.0
	まったくそうでない	2.7	0.5	0.9	2.6	1.7
お互いに助けあう	とてもその通り	21.0	72.4	35.8	48.1	70.9
	わりとその通り	27.1	18.1	33.8	35.2	18.6
	少しその通り	31.4	6.1	20.0	10.5	7.5
	あまりそうでない	16.3	2.6	8.1	3.1	2.0
	まったくそうでない	4.2	0.8	2.3	3.1	1.0
近所とよくつきあう	とてもその通り	21.3	41.0	34.7	44.7	64.8
	わりとその通り	26.7	31.4	31.0	30.8	21.5
	少しその通り	22.8	13.5	18.6	10.4	7.1
	あまりそうでない	19.1	9.0	12.2	4.9	3.0
	まったくそうでない	10.1	5.1	3.5	9.2	3.6
親戚と仲がよい	とてもその通り	45.9	75.1	49.6	48.2	62.6
	わりとその通り	27.7	16.9	31.8	22.6	20.7
	少しその通り	16.8	5.1	11.4	13.0	8.4
	あまりそうでない	7.2	2.0	6.1	7.6	4.5
	まったくそうでない	2.4	0.9	1.1	8.6	3.8
みんなが幸せ	とてもその通り	37.2	77.8	48.1	39.4	56.3
	わりとその通り	26.8	16.8	28.3	38.7	29.9
	少しその通り	22.5	3.2	16.1	14.0	8.3
	あまりそうでない	9.9	1.7	6.3	5.7	3.8
	まったくそうでない	3.6	0.5	1.2	2.2	1.7

しかしこうした家族の姿と、その中で暮らす子どもの姿は、また別のものがあるかもしれない。そこで、子どもの環境としての家族を掘り下げるために、表19の設問を用意した。居心地が「楽しいか、のんびりするか、また緊張・いらいらがあるか」を探ってみよう。

ここでも表17と同じく、肯定的項目には「とてもそう」、否定的項目には「ぜんぜんそうでない」が最大の分布をみせており、全体として、家族の中での子どもの居心地のよ

さがみてとれる。しかしここでは、そうした中で否定的に家族をとらえる子どもたちの割合に注意をむけてみる。それぞれの表の下部にそれを示した。

まず「楽しい」についてみれば、ここでもニューヨークの数値は5%と否定率は最小で、ここでみる限り、アメリカの家族が底抜けに楽しい環境として受けとめられているかに見受けられる。しかし、アメリカの影の部分は「緊張する」「いらいらする」の中に見えかく

表18 家族評価（まとめ）

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
経済的に豊か	27.7	20.4	22.0	19.4	52.9
食事がおいしい	52.4	55.6	38.0	69.9	73.6
家族が仲がよい	40.8	82.3	53.1	52.9	53.5
お互いに助けあう	21.0	72.4	35.8	48.1	70.9
近所とよくつきあう	21.3	41.0	34.7	44.7	64.8
親戚と仲がよい	45.9	75.1	49.6	48.2	62.6
みんなが幸せ	37.2	77.8	48.1	39.4	56.3
「とてもその通り」の平均	35.2	60.7	40.2	46.1	62.1

「とてもその通り」の割合

○ は1位

○ は2位

— は5位

れしているかに思える。自分の家で「とても・わりと緊張する」子が18%という数字はかなり深刻ともいえる数字だろう。また「いらいらする」は順位こそ2番目だが、21%と、これも少なからぬ割合だ。ちなみにロンドンについては「いらいらする」が31%で、「少し」を合わせると、半数近くがいらいらを感じている。

こうした影の部分、ソウルについてもみられる。「緊張する」が13%、「いらいらす

る」が15%と、アジア文化圏の中では突出している。韓国の低年齢からの熾烈な受験競争とのかかわりもありそうである。それに比べると、東京の子は「いらいらする」の数字は10%だが、「緊張する」はわずか4%で、最も低い。

こうした影の数値でみると、5つの都市で最も居心地がいい家庭にいるのは東京と上海の子で、ソウル、ニューヨーク、ロンドンとも、「楽しい」家庭だとする表現はさておき、何らかのきしみがある感じを受ける。

図2 家族評価(まとめ)

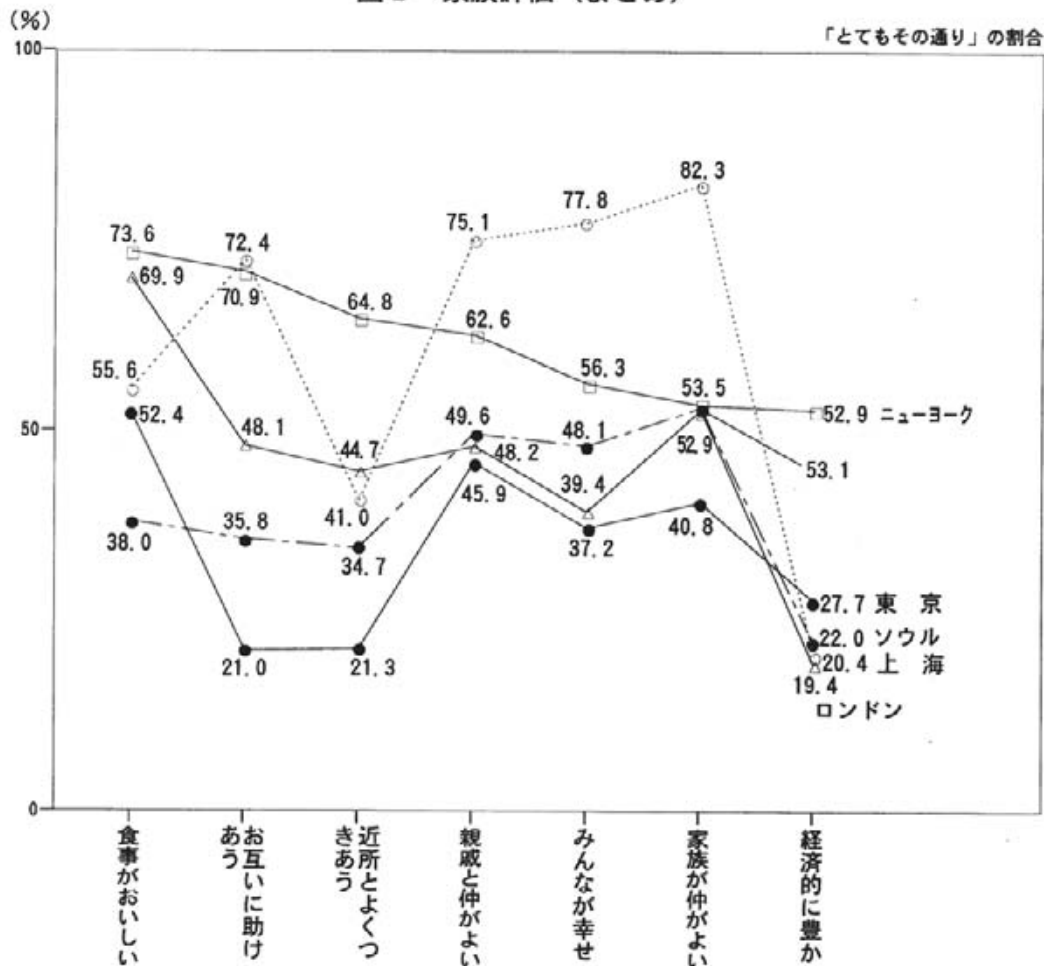


表19 自分の家の居心地

(%)

		東 京	上 海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
楽しい	とてもそう	41.6	52.9	42.8	49.3	66.5
	わりとそう	23.5	26.8	24.7	29.5	20.2
	少しそう	17.4	11.6	15.0	11.6	8.6
	あまりそうでない	10.2	4.1	9.9	4.7	2.4
	ぜんぜんそうでない	7.3	4.6	7.6	4.9	2.3
	否 定 率	17.5	8.7	17.5	9.6	4.7
のんびりする	とてもそう	37.9	24.2	47.5	47.3	57.9
	わりとそう	24.0	27.6	28.1	27.6	26.0
	少しそう	19.5	19.5	10.9	12.5	8.0
	あまりそうでない	9.5	18.3	8.1	6.2	4.4
	ぜんぜんそうでない	9.1	10.4	5.4	6.4	3.7
	否 定 率	18.6	28.7	13.5	12.6	8.1
緊張する	とてもそう	1.4	1.2	4.8	4.7	7.6
	わりとそう	2.1	4.6	7.9	10.3	10.5
	少しそう	4.5	9.0	10.3	16.2	18.5
	あまりそうでない	14.2	28.5	30.2	20.3	19.4
	ぜんぜんそうでない	77.8	56.7	46.8	48.5	44.0
	肯 定 率	3.5	5.8	12.7	15.0	18.1
いらいらする	とてもそう	4.5	1.4	5.2	15.6	8.1
	わりとそう	5.7	4.3	9.7	15.4	13.0
	少しそう	10.1	7.8	12.3	17.5	17.7
	あまりそうでない	24.1	27.4	27.2	24.5	22.4
	ぜんぜんそうでない	55.6	59.1	45.6	27.0	38.8
	肯 定 率	10.2	5.7	14.9	31.0	21.1

●子どもの成長)))

1) 子どもの自己像

こうして子どもの目を通して、家族や家庭の現状をみてきたところで、そうした中で成長している子ども自身にも接近してみよう。

表20(図3)は子どもの自己評価の結果から「とてもそう」と積極的な評価をした子の割合をまとめたものである。

ここでも家庭についてと同様に、ニューヨークの子どもたちの自己肯定率の高さがみられる。上海の子どもの自己肯定率も、それに次いで高い。肯定率を仮に平均してみると、ニューヨークと上海がダントツで、次いで、ロンドン、少し水をあけて東京とソウルが位置している。果たしてこの順で、子どもの健康性や幸せがその暮らしの中にあるのだろうか。

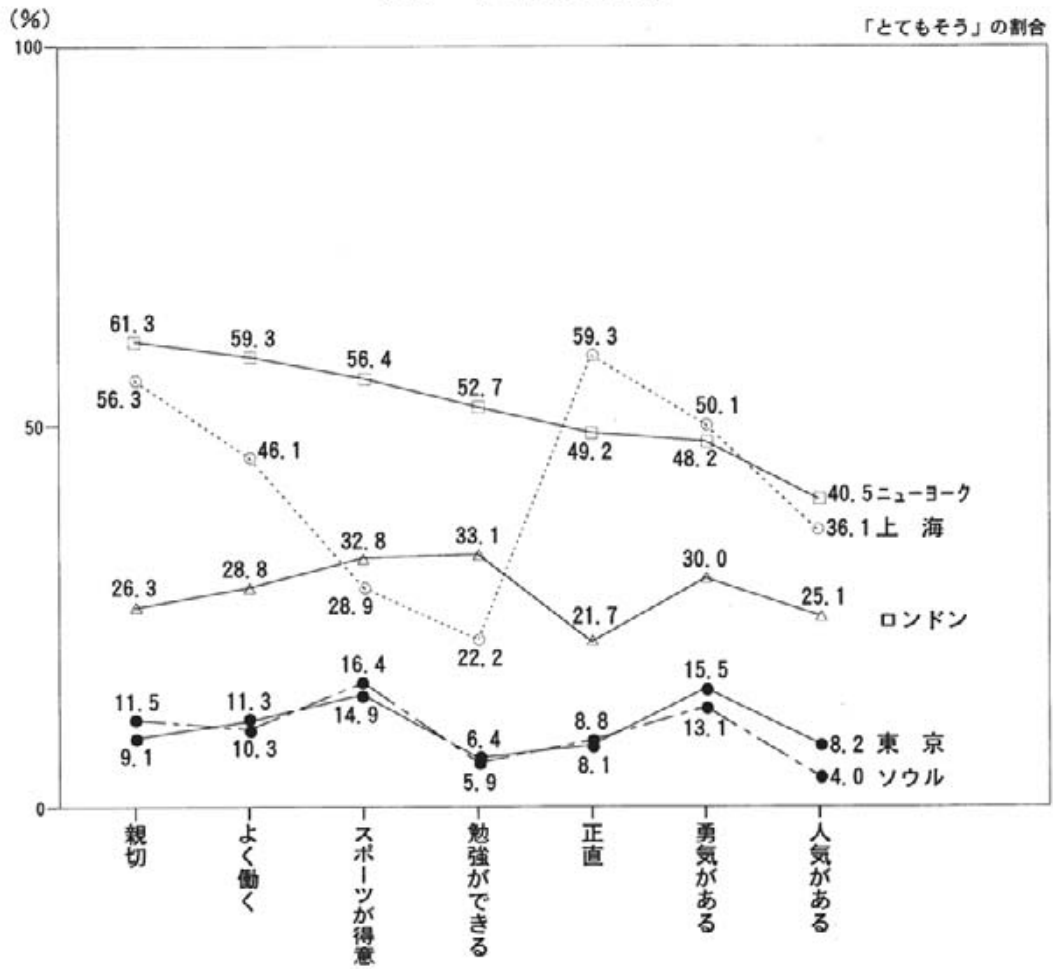
表20 子どもの自己像

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
正直	8.1	59.3	8.8	21.7	49.2
親切	9.1	56.3	11.5	26.3	61.3
勇気がある	15.5	50.1	13.1	30.0	48.2
よく働く	11.3	46.1	10.3	28.8	59.3
人気がある	8.2	36.1	4.0	25.1	40.5
スポーツが得意	14.9	28.9	16.4	32.8	56.4
勉強ができる	6.4	22.2	5.9	33.1	52.7
肯定率平均	10.5	42.7	10.0	28.3	52.5

「とてもそう」の割合

図3 子どもの自己像



2) 子どもの幸せ感

われわれおとなが、一番気にかけているのは、子どもが幸せ感を持って過ごしているかどうかである。表21(図4)によれば、最も幸せ感強いのは、上海ということになる。いま中国は経済の開放政策が始まり、とくに上海は経済都市として、活気に満ちている。第2職業(アルバイト)に励む人が多く、皆が豊かさを求めて躍起になって働いている。こうした、日本の戦後にも似た発展途上の社会では、子どもに幸福感が生まれるのも不思議

ではないかもしれない。とにかく、「とても・かなり幸せ」を合わせて、94%はすごい数字である。しかし、ニューヨークでも87%の数字がある。もともと幸せ感は主観的なものであることを、ふまえるべきだろう。

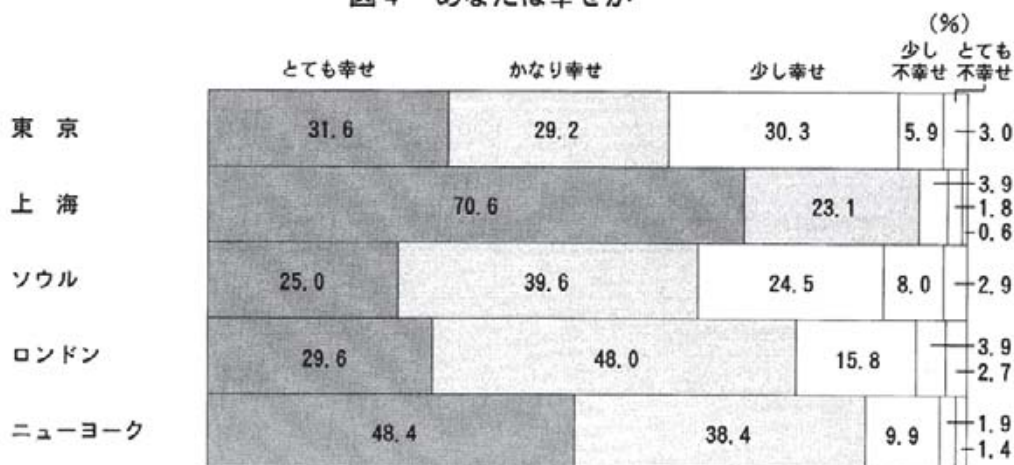
次いでロンドンの78%、ソウルの65%、東京は最低の61%という結果である。それに比べると、不幸せと言っている子どもはあまり差がなくて、数パーセントというところである。子どもとは、どの社会にあっても幸せ感の強い者たちなのであろう。

さてそうした中でも、不幸せとまではいか

表21 あなたは幸せか

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
とても幸せ	31.6	70.6	25.0	29.6	48.4
かなり幸せ	29.2	23.1	39.6	48.0	38.4
少し幸せ	30.3	3.9	24.5	15.8	9.9
少し不幸せ	5.9	1.8	8.0	3.9	1.9
とても不幸せ	3.0	0.6	2.9	2.7	1.4

図4 あなたは幸せか



なくても、抑鬱感情の存在は折々にあるもの
 だろう。その量を試みよう。表22によると
 「学校へ行きたくない」という登校忌避感情
 (図5)は、ニューヨークとロンドンが飛び
 抜けて多く、70%と62%にも達する。前回ま

でのデータでも、欧米文化圏の子どもはアジ
 ア文化圏の子どもより、登校忌避感情が強い
 ことが見いだされていたが、ここでも同様で
 ある。不登校が社会問題化している日本だが、
 東京の数字はソウルと並んで3割弱でしか

表22 子どもの抑鬱感情

(%)

		東 京	上 海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
学校へ行きた くない	とてもそう思う	12.4	1.3	12.1	32.1	41.8
	わりとそう思う	15.0	2.2	16.0	30.0	28.3
	あまりそう思わない	36.0	7.7	38.4	15.8	12.1
	ぜんぜんそう思わない	36.6	88.8	33.5	22.1	17.8
	肯 定 率	27.4	3.5	28.1	62.1	70.1
毎日がつまら ない	とてもそう思う	6.4	7.7	15.8	12.2	9.7
	わりとそう思う	11.1	10.9	20.9	27.6	26.3
	あまりそう思わない	37.7	39.8	34.6	29.4	28.7
	ぜんぜんそう思わない	44.8	41.6	28.7	30.8	35.3
	肯 定 率	17.5	18.6	36.7	39.8	36.0
私は運が悪い	とてもそう思う	18.0	5.8	10.5	12.0	11.2
	わりとそう思う	19.2	14.0	22.2	25.0	24.3
	あまりそう思わない	36.8	34.7	38.9	23.4	20.8
	ぜんぜんそう思わない	26.0	45.5	28.4	39.6	43.7
	肯 定 率	37.2	19.8	32.7	37.0	35.5

い。しかし上海の子どもはわずか4%であり、この数字もすごい数字である。

次の「毎日がつまらない」(図6)でもほぼ似た傾向で、ニューヨーク、ロンドン、ソウルは「つまらない」と思うが3分の1を超

えるが、東京と上海は「つまらない」が2割を下回っている。次の「私は運が悪い」では、上海だけがやや低めの他はどの都市も3割台である。しかしこれは質問の意味が、子どもに十分理解されていないかもしれない。

図5 学校へ行きたくない

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない (%)
東京	12.4	15.0	36.0	36.6
上海	2.2 7.7	1.3	88.8	
ソウル	12.1	16.0	38.4	33.5
ロンドン	32.1		30.0	15.8 22.1
ニューヨーク	41.8		28.3	12.1 17.8

図6 毎日がつまらない

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない (%)
東京	6.4	11.1	37.7	44.8
上海	7.7	10.9	39.8	41.6
ソウル	15.8	20.9	34.6	28.7
ロンドン	12.2	27.6	29.4	30.8
ニューヨーク	9.7	26.3	28.7	35.3

3) 将来展望

前途に目標があり、誰もがそれを達成できそうな感じをもてる社会では、子どもは早く大きくなりたがる。かつての発展途上の日本がそうであった。しかし子どもにストレスがかかる社会では、子どもたちは、まるで人生に疲れたおとなのようにいい時代だった幼い頃を懐かしみ、もっと幼い頃に帰りたと思う。

それぞれの都市の子どもたちが、いわば前

進的か退嬰的かを追ってみよう。表23(図7)に示したように、ロンドンとニューヨークでは、子ども時代に戻りたい子は、ほとんどいない。目を引くのはソウルの34%の突出した数字である。ソウルの子どもたちの熾烈な勉強ぶりからうかがえる勉強に疲れた子どもの姿が見える気がする。

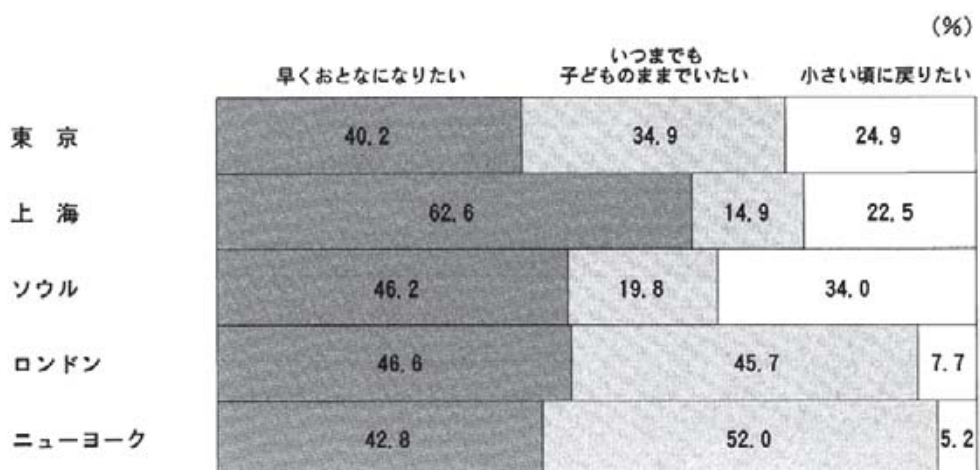
上海では、早くおとなになりたい子が63%と突出している。上海を訪れて感じる子どもたちの元気さや勢いはこの数字にあらわれている感じを受ける。

以上、プロフィールとして似ているのは、

表23 早くおとなになりたいか

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
早くおとなになりたい	40.2	62.6	46.2	46.6	42.8
いつまでも子どものままでいたい	34.9	14.9	19.8	45.7	52.0
小さい頃に帰りたい	24.9	22.5	34.0	7.7	5.2

図7 早くおとなになりたいか



やはりニューヨークとロンドン、東京とソウル、そして単独に上海であろう。

では、おとなになったときに、子どもたちは、どんなおとなになれそうかと思っているのだろうか。

表24に示したように、家庭的達成（図8）と、社会的達成（図9）とに分けて、「きっとそうなる、たぶんそうなる、あまりそうならない、ぜったいそうならない」の選択をさせた。また「きっとそうなる」の数字を平均して、表の下部に掲げてある。

まずどの都市でも、社会的達成より家庭的

達成の方がはるかに容易そうだと考えられている。また社会的達成では、ソウルとニューヨーク、上海が東京、ロンドンより多少高く、また家庭的達成では上海、ニューヨーク、ソウルの数字が高くなっている。つまりこの数字でみると、社会的達成、家庭的達成の両方が低いのは、東京とロンドンであることがわかるが、とりわけ東京の数字は、ロンドンよりも著しく低いのが気になる。

表24 どのおとなになれそうか

(%)

		東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
家庭的達成	皆から好かれる人になる	7.6	47.5	20.5	10.7	16.2
	よい父(母)になる	18.4	64.3	57.2	47.2	66.0
	幸せな家庭を作る	34.7	58.7	66.8	53.8	70.3
	肯定率平均	20.2	56.8	48.2	37.2	50.8
社会的達成	有名な人になる	7.9	9.6	15.6	14.3	14.9
	お金持ちになる	7.6	15.7	15.2	17.2	18.1
	仕事で成功する	15.9	37.5	40.2	17.2	31.9
	肯定率平均	10.5	20.9	23.7	16.2	21.6

「きっとそうなる」割合

図8 家庭的達成

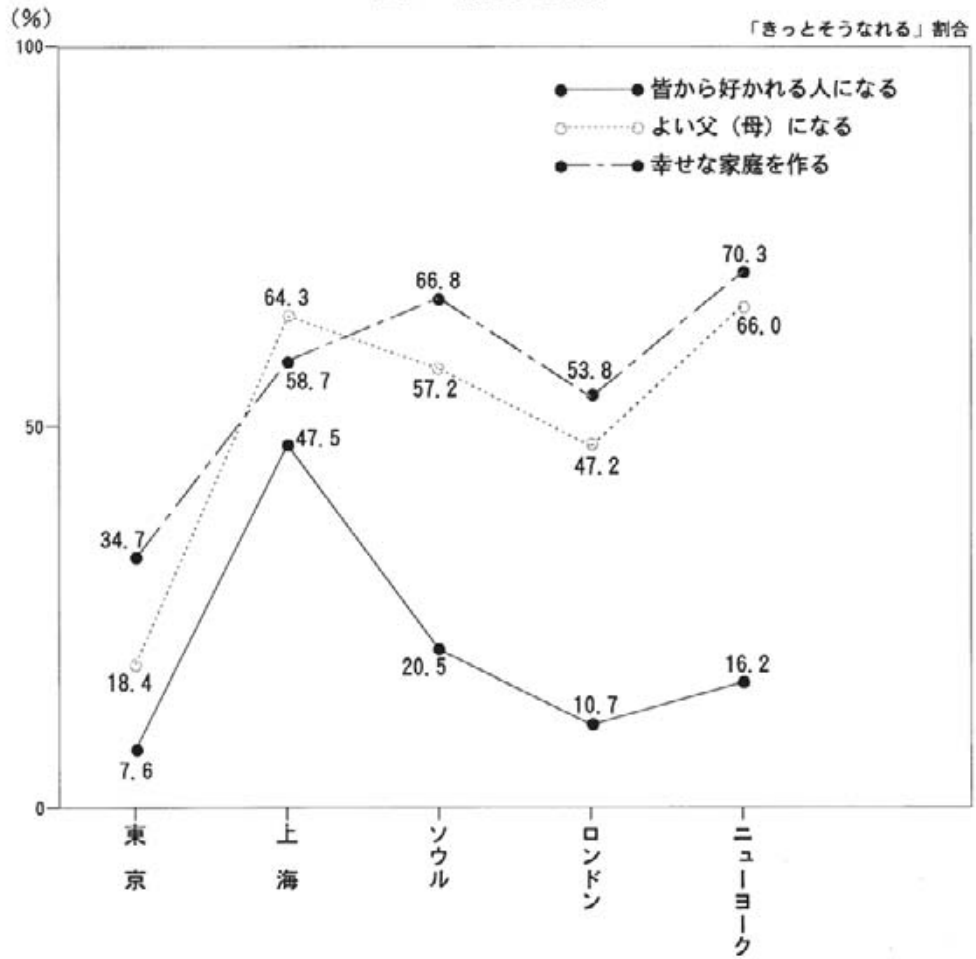


図9 社会的達成

